



# 辛くない留学体験記

第53回 徐 立元 (University College London)

**著者紹介** ▶ 1994年生まれ。2017年東京大学工学部計数工学科卒業。2019年同大学院情報理工学系研究科コンピュータ科学専攻修士課程卒業。2020年 University College London Gatsby Computational Neuroscience Unit での Ph.D. 課程に入学。機械学習・統計の研究に従事。

## 1. はじめに

はじめまして、UCL (University College London)大学の GCNU(Gatsby Computational Neuroscience Unit) という研究所で去年の9月から博士課程に在学している、徐立元です。今回お話をいただいて、筆者自身の留学体験記のような形で、海外でのPhD進学に至った経緯や、実際の海外での生活についてお話しします。とはいえ、後述するように、自身の留学は「なんかもったいないな」という動機から始まり、「その場の流れに乗った」結果と言っても過言ではないため、あまり参考にはならないかもしれません。加えて、COVID-19の影響で今年の3月から日本からリモートワークをしているので、海外生活もほぼ半年間しか送っておらず、生活面でも中身のある話はあまりできそうにありません。とはいえ、それなりに数奇な経緯で今の状況に至っているため、最後までお付き合いいただけたら幸いです。

## 2. 海外大学院進学を意識するまで

筆者自身の経歴としては、学部・修士と東京大学で過ごしてきて、その間留学や海外生活に関しては全く経験がありませんでした。モチベーションに関しても何となく「海外で生活してみたいな」という漠然とした憧れはありましたが、具体的な行動につながることはなく、大学の同期が大学学部の卒業後、直接海外大学院に進学しているのを見て「羨ましいな」という感想を抱く程度でした。

実際、学部卒業時点では、日本の博士課程に進学するかどうかすら迷っていて、修士1年のときには就職活動を行っていました。

そんな筆者が初めて海外留学を意識したのは孫正義育英財団に合格したときでした。孫正義育英財団というのはソフトバンクのCEOである孫正義氏が「『高い志』と『異能』を持った若者に自らの才能を開花できる環境を提供し、人類の未来に貢献する」人材を支援するために立ち上げた財団で、本学会学生編集委員長を務める佐久間洋司氏や全脳アーキテクチャ若手の会を設立した大澤正彦氏なども所属する財団です。とはいえ、当時の筆者には留学や起業などの具体的な目標はなく、友達に「面白い人があるよ」と紹介されて気軽に応募したというのがきっかけです。実際財団の人達はとても魅力にあふれていました。その中で、海外大学院や海外大学に進学している人と話しているうちに、「せっかく財団に合格したのに、留学しないのもったいないかな」と思い始めたのがすべての始まりでした。実際に財団の友人達から「徐くんなら留学できるでしょ、おすすめ!」と(無責任に?)煽られたのも今から考えると大きな一因だったと振り返って思います。とはいえ、この時点ではまだまだ留学は筆者の中では現実味のないものでした。

## 3. 初めての国際会議と留学準備

漠然としていた留学が一気に現実味を得たのは初めての国際会議です。幸

運にも修士1年のときに書いた論文がAISTATSという国際会議に通り、スペインのランサローテ島でポスタ発表をさせていただきました。ポスタ発表では自分の引用した論文を書いた先生とディスカッションができたり、海外の博士学生と仲良くなってランサローテ島の名産のワインを飲みながら再生核ヒルベルト空間について夜通し議論したり、本当に楽しかったのを覚えています。こういった体験が楽しすぎて、「年に数回リゾートに研究費で行ける研究者って最高じゃん!」という邪すぎる動機で博士課程に進学することを決意します。

また、このAISTATSで今の指導教員のArthur Gretton先生と初めてお会いしました。筆者自身とても憧れていた先生で緊張しましたが、話してみるととても気さくで驚きました。当時の指導教員だった杉山将先生からも「博士課程を過ごすのにArthurの所属するGatsby Unitはとても良いところだよ」と強い後押しを受け、前の「もったいない精神」もあり、留学を真剣に考え



図1 研究室訪問をしたときのArthur

始めます。その後一度ロンドンで研究室訪問をし、海外留学をする決意を固めました。

留学の準備は修士 2 年の 10 月ぐらいから取り掛かりました。しかし、これはあまり胸を張って言うことではないのですが、応募の書類づくりに関してはほぼ、孫正義育英財団の友人の手を借りました。応募にあたって、推薦状の草案や研究計画書などさまざまな英文の書類を作成する必要があるのですが、そのすべてにおいて、その友人が筆者の拙い英語をクオリティの高いものに書き換えてくれました。また、留学のための英語テストも基準点を達成できず、最終的に Gatsby Unit 側に特例をお願いすることになっています。そのため、筆者は留学の準備に関して何か偉そうなことをいえる立場には全くありません。しかし、それでもアドバイスをするとすれば「持つべきものは友」ということと「お願いすると何とかできることがあるから諦めるな」ということになるかと思えます。

無事、書類審査を通過すると、ロンドンでの二次試験に招待されます。しかし、筆者は国際会議の発表と重なってしまったせいで、他の受験生とは別の日に一人で受けることになります。その結果、朝 10 時から、30 分の研究発表をし、発表中で紹介した定理の証明の解説をするホワイトボード面接を 2 回それぞれ別の教授と行い、そして最後、Arthur 先生から渡された論文の証明の再現を 2 時間半かけて行うという猛烈なスケジュールを 1 日で行う羽目になりました。疲れすぎて、午後 4 時にホテルに戻るとすぐにベッドに倒れ込んだのを覚えています。それでもその日の夜、Arthur 先生とその学生達とご飯を食べたときに合格を仄めかされたときは天にも昇る心地でした。

#### 4. ロンドンでの留学生活

留学していてよく聞かれる質問は、生活費や学費などのお金に関連した話と

向こうでの(食)生活についてです。辛いことにこれらについて筆者はあまり苦労していませんでした。お金に関しては Gatsby Unit が UCL での学費をすべてサポートし、そのうえでロンドンでの生活に困らないほどの奨学金を受給しています。さらに、孫正義育英財団の提供するシェアハウスに住んでいるため、家賃もかからず、金銭面では苦労せずにすんでいます。

また、ロンドンは世界的に「ごはんの美味しくない国」として有名ですが、暮らしてみると案外そうでもないように思います。もちろん、日本と比べて美味しいご飯を探すのは大変ですが、その「まずさ」は食べ物に薄味すぎるところに起因しているため、自分でテーブルにある塩をちゃんと加えて味付けすることで十分対応できます。個人的な意見ですが、高校生のときに 1 週間の研修で行ったワシントン DC での食生活のほうが油の味がクドすぎて辛かったです。

もちろん、異国ならではの大変さ、英語で暮らしていかなくてはならない息苦しさ、家の設備の古さ(夜中シャワーを浴びていると急に冷水になることがある)など生活の面で不便なことはありました。しかし、致命的に困ることはなく過ごせています。特にロンドンはビールとウイスキーがとても美味しく、そこだけ見ると最高の環境です。

また、COVID-19 の影響で働き方がフルリモートに移行してからは日本から研究をしています。これも、時差の関係上夜の 10 時からのミーティングが平日多く入るなど大変なこともあります。自分の好きなタイミングで仕事ができるという点で、今は楽しめています。

#### 5. おわりに

まだ留学を始めて 1 年ぐらいですが、ざっくり応募と最初の半年間ロンドンで過ごした経験を書かせていただきました。本当なら「留学準備で苦労した話」や「海外生活で辛かった話」なども書いたほうが良いと思うのですが、これ以上何を望むのか、と言ってよいほど環境に恵まれていて、特に苦労も辛い話もなかったというのが正直な気持ちです。これも、留学当初から多大な支援をいただいている孫正義育英財団や、修士時代に指導して下さった杉山 将先生、佐藤一誠先生、本多淳也先生、さらには暖かく送り出してくださった両親のおかげです。現状は日本からリモートワークで「留学」をしているという大変奇妙な状況ですが、この状況にも負けず、機械学習分野に貢献したいと思っています。最後までお読みいただきありがとうございます。ありがとうございました。



図 2 シェアハウスでホームパーティ